

〔研究ノート〕

閉ざされた空間
—明代蘇州における庭園画の一典型—

明代後半、中国の江南地方では経済の発展を受けて文人たちの間に造園の趣味が広まります。これに伴い、実在の庭園を描く絵画も数多く作られました。庭園画の役割は、主人の美学・志やそこで行われた友人との集いを顕彰するため、あるいは、いずれは所有者が変わって改築されたり、荒廃したりする庭園を記録するためなど、様々な考えられます。自分や友人・パトロンのために描かれるこのような庭園画には、程度の差はあっても、なんらかの理想化がほどこされました。人々は庭園にどのような空間であることを求めているのでしょうか。絵画を通じて、時代によって移り変わる理想の形を読み解きたいと思います。

ここで問題にしたいのは、蘇州の文人たちの間で流行した「小さな」庭園図像です。まず、16世紀前半の代表的文人画家・唐寅の「西洲話旧図」（台北国立故宫博物院、図1）を見てみましょう。旧友の西洲との語らいを記念した自画像的な作品で、茅屋の中に唐寅と西洲が座っています。2人の周りには、奇石や棕櫚・竹などの植物が描かれ、舞台が庭園の一角とわかります。この庭園図像の特徴としては、空間の奥への広まりを表す後景描写が排除され、モチーフは前景のみ、しかも石や植物が人物を取り囲むように配されている点が挙げられる

でしょう。

同様の特徴は、蘇州文人画壇の領袖で、唐寅の友人でもある文徵明の「吉祥庵図」にも見られます。文徵明が僧・権峰と劉嘉緒との吉祥庵における詩会を懐かしみ、2人が亡くなり吉祥庵も消失した後に、劉の息子の求めに応じて描いた作品です。原図は所在不明ですが、交流のあった陸師道の模本（台北国立故宫博物院、図2）が残っています。やはり近景に焦点が当たっており、松や芭蕉などを加えた庭園植物と奇石が、権峰と劉嘉緒の座す草堂の周りに隙間なく配されます。この種の庭園図像は、唐寅・文徵明以降、江南の文人たちによって広く描かれていきました。ここでは例として、17世紀に活躍した、蘇州の王翬「秋景山水図」（上海博物館、図3）と松江の趙左「竹院逢僧図」（大阪市立美術館、図4）を挙げておきます。

このような庭園図像のモデルと考えられるのが、盧鴻「草堂十志図」です。盧鴻は唐代の文人画家で、「草堂十志図」は、彼が嵩山での隠遁生活を10篇の詩に詠み、10図の画に描いた作品と言われています。複数の模本がありますが、唐代の様式を伝える最も古様な作品は台北国立故宫博物院本でしょう。「草堂十志図」は、明代後半の江南でよく知られた古画で、複数の文人画

家がこれに倣った作品を制作したことが指摘されています。

「草堂十志図」の10図は、画中の盧鴻が山頂に立ったり、激流の傍らに座ったりする開放的な場面と、山中の住居や洞窟の中で友人と語り合う内向的な場面に二分されます。後者に属する「草堂図」（図5）の文章の中で、盧鴻は小さく簡素な空間こそが最も住居にふさわしいと述べています。さらに、様々な薬草・香草に囲まれた「陰陰として蓬（ふか）く、馥郁として香る」草堂で修練を積むことで、人はいつまでも変わらぬ心身の健やかさを手に入れることができるのだという言葉が続きます。この「草堂図」や「槿館図」（図6）では、近景のみが描かれ、盧鴻と友人の座る場所を中心に、周囲が隙間なく樹石モチーフで充填されています。唐寅や文徵明らは、この古様な図像を意識して、自分や友人の庭園を絵画化したのでしょうか。そこには、かぐわしい植物や美しい奇石に囲まれた小さな庭園空間に守られて、思索にふけり、親しい友人と語り合いたいという願いが込められています。

この内向的な庭園図像が明代後半の文人社会で流行した要因の一つとして、彼らの居住環境が郊外型から都市型に変化したことが考えられます。例えば、唐寅は蘇州城内の繁華街で飲食業を営む家に生まれ、科挙による立身出世の夢を断たれた後は、生涯を都市の喧噪の中で過ごしました。文徵明は唐寅の生活について「どのようにして街の騒音から逃れるのだろうか。彼はそのために、家を古今

の書物で満たしている。4、5冊を並べながら、2、3壺の酒を傾けるのである。」と詠っています（「飲子畏小樓」）。「西洲話旧図」は、そのような唐寅の生活態度を理想的に表現したと解釈できるかもしれません。また、文徵明自身の住居や、前述の吉祥庵も唐寅宅からほど近い場所にありました。当時数多く作られた蘇州の庭園記の中には、隣家の煩さに不満をもらしつつ、草花に囲まれた静かな庭園を賛美し、その狭さや粗末さをむしろ誇示するものもあります（湯伝禮「荒荒齋記并銘」）。都市の繁栄が、その中で暮らす文人たちに、外界から隔離された静謐な小空間を理想とする庭園画を描かせたのではないのでしょうか。

一方で、明代後期には、画卷や画冊の形式を用いて、豪華な庭園の多様で複雑な景観を表そうとした庭園画も作られています。また、山水景と融合させたり、時には西洋の遠近法を用いたりして庭園の広大さを強調した作品もありました。庭園空間に期待される様々な役割を、絵画を通じて考察していくのは興味深い作業になりそうです。（植松瑞希）

※図1、2、5、6は『故宫書画図録』（台北：国立故宫博物院、1989年～）、図3は『中国絵画全集』（北京：文物出版社、1997年～）、図4は『大阪市立美術館蔵品選集』（大阪市立美術館、1986年）より複製いたしました。

図5



図6



図1



図2



図3

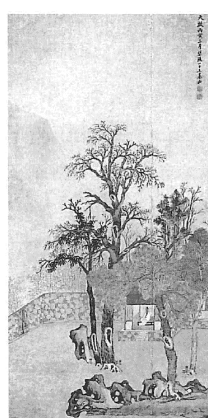


図4

